

大洲城跡（本丸）

I. 調査の概要

1. 調査名 城山公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査
2. 所在地 大洲城跡本丸（大洲市大洲）
3. 調査期間 平成30年12月～令和元年6月（予定）
4. 調査面積 約48㎡
5. 調査体制 調査主体：大洲市教育委員会／調査指導：大洲城跡石垣保存修復委員会（委員長：下條信行愛媛大学名誉教授）
6. 調査の目的

今回の調査成果のポイント！

- ①大洲城の前身の地蔵ヶ嶽城と思われる遺構を初めて発見
- ②石組みの穴蔵など絵図に描かれてない江戸期の遺構を発見

本市では「城山公園植栽整備計画」に基づいて植栽整備を進めており、愛媛県指定史跡「大洲城跡」内でもある本丸での新植箇所の選定・検討を行うために、事前の発掘調査を実施し地下遺構の確認を行いました。

II. 調査成果について

今回調査を行った本丸の東側部分については、江戸期の絵図によれば、多聞櫓に囲まれた内部の空間に建物等は無く広場だったことが分かります。廃城後に大洲城の公園化が推進されると、明治期には桃園として整備されたり、昭和期には動物の飼育小屋なども設置されました。今回の調査でも、明治期以降の植栽や建物等の基礎工事によって江戸期の地面が掘り返された痕跡（攪乱坑）が数多く確認されました。ただ、このような破壊から免れた遺構も数多く残存していることや、これらの遺構には大きく分けて3時期のものがあることなどが明らかになりました。

①中世

今回の調査で発見された最も古い遺構のSW01(6cTr)は、地表下50cmで発見された、長さ1m、高さ約50cmの石積み遺構で、本丸を造成した盛土の中から発見されました。大洲城は天正14(1586)年の小早川氏以降の城主によって、現在のような近世城郭（高石垣や瓦葺きの建物などを用いた城）として整備されていたと考えられており、本丸の造成もこの頃に行われたと考えられます。このことから、盛土の中で発見されたSW01はそれより以前の中世段階の遺構と判断されます。

この盛土内からは土師器（杯・皿）が多量に出土したほか、貿易陶磁器（青磁・白磁・青花）や備前焼などの陶磁器類も見つかり、陶磁器類から15世紀後半から16世紀中頃のものと考えられます。さらに、多くの炭化物とともに焼けた土の塊が多数出土しました。この土の塊の中には、表面を平坦に整えたものや、木舞（土壁の下地として竹や細木を格子状に組んだもの）の痕跡が残っているものなどがあり、建物の壁土だったことが分かります。これらは本丸の造成時に盛土の中に破棄されたもので、この造成前に火災等により焼失した建物が存在していたことが考えられます。

これらのことから、石積み遺構は16世紀中頃以前の中世城郭の曲輪の一部ではないかと考えられます。16世紀中頃の大洲城は地蔵ヶ嶽城と呼ばれ、宇都宮氏が城主だった時期にあたることから、現時点で石積み遺構は地蔵ヶ嶽城の遺構ではないかと考えています。これまでの大洲城内の発掘調査でも中

世段階の遺物は出土しており、中世段階に何らかの土地利用があったことは推定されていましたが、城郭の存在を示すような明確な遺構は発見されていませんでした。今回の発見は中世城郭の遺構としては初めての検出であり、地蔵ヶ嶽城の存在を示唆する重要な成果といえます。

また、16世紀中頃以降という時代は地蔵ヶ嶽城でも多くの合戦が行われた時代で、焼失した建物の存在はこうした歴史事象を物語るものであり、今後文献史学からの検証も進めていく必要があるといえます。

②江戸時代前期

江戸時代の絵図の中には本丸内に御殿が描かれたものが3枚残っており、かつて本丸内には御殿が所在していたと考えられます。絵図からは本丸御殿が7間×17間(約13.7×33.3m)の規模だったことが分かります。これら絵図の年代はいずれも不詳で本丸御殿の存在した時期は判然としませんが、元禄5(1692)年の絵図以降の絵図には本丸に御殿が描かれていないことから、それ以前の江戸時代前期に所在した可能性が高いと考えられます。文献においても、加藤貞泰が藩主の頃(1617～1623年頃)に加藤清右衛門という人物が隠居して本丸御殿に配置されたという記録が残っています(『藩臣家譜 第一巻』)。

今回の調査の結果、礎石や基礎石など本丸御殿に関係する明確な遺構は発見されませんでした。しかし、ちょうど御殿推定位置の周縁にあたる部分で、いずれも特徴的な灰色シルト(粘土)で埋まったSK05(1Tr)、SK09(2Tr)、SK13(4Tr)、SK15(5Tr)の4基の遺構が発見されています。当初は建物周りの雨落ち溝の可能性を考えましたが、SK13やSK15は深めに掘られた穴に多数の礫や瓦が入れられた土坑であり、埋土は共通するものの、4基の遺構に連続性は見られずその性格は不明です。ただ、位置関係から本丸御殿に関係する何らかの遺構である可能性は否定できず、今後更なる検証が必要といえます。

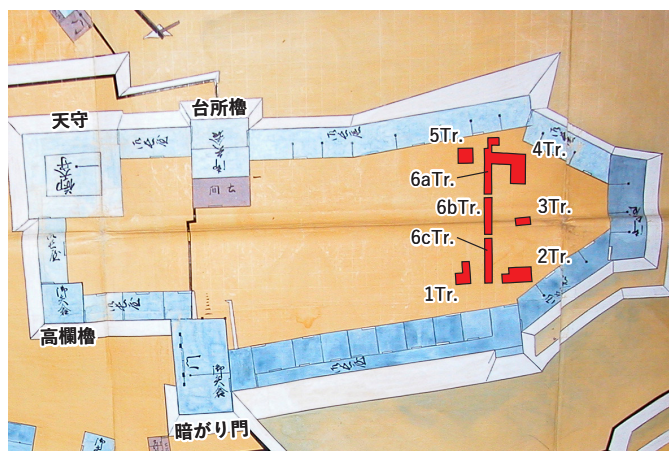


図1 大洲城絵図と試掘トレンチの位置
(元禄5(1692)年『御城中御屋形並地割図』)



図2 本丸御殿の描かれた絵図
(江戸時代前期?『大洲御城地割図』)

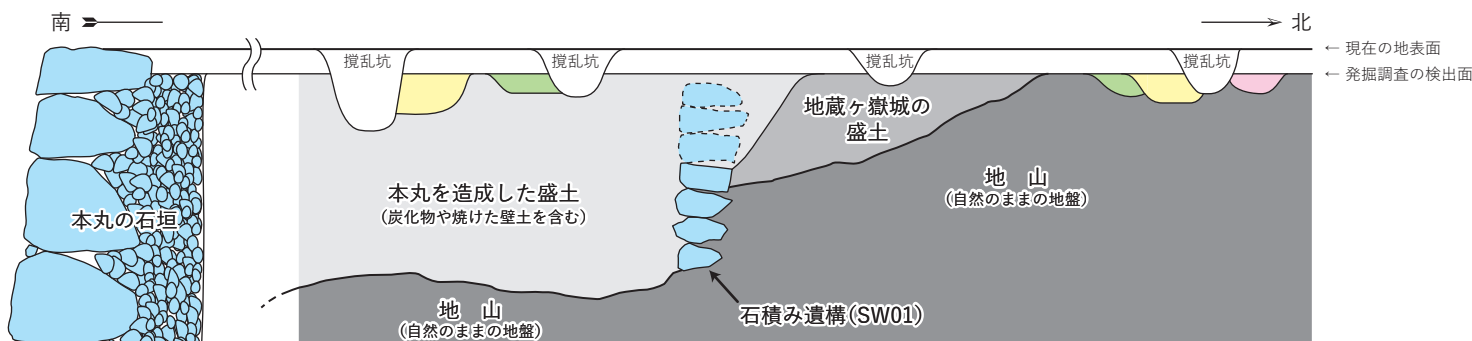


図3 本丸造成過程の推定図(南北方向)



①石組みの穴蔵 SX02(4,6aTr.)

底面は地山のままで石貼り等は見られず、漆喰などによる防水加工も施されていない。



②大甕の据えられた土坑 SK10(4Tr.)

底の粘土層の上には炭層が見られることから、甕の内部で火が焚かれ、その後、瓦が投棄されたと思われる。



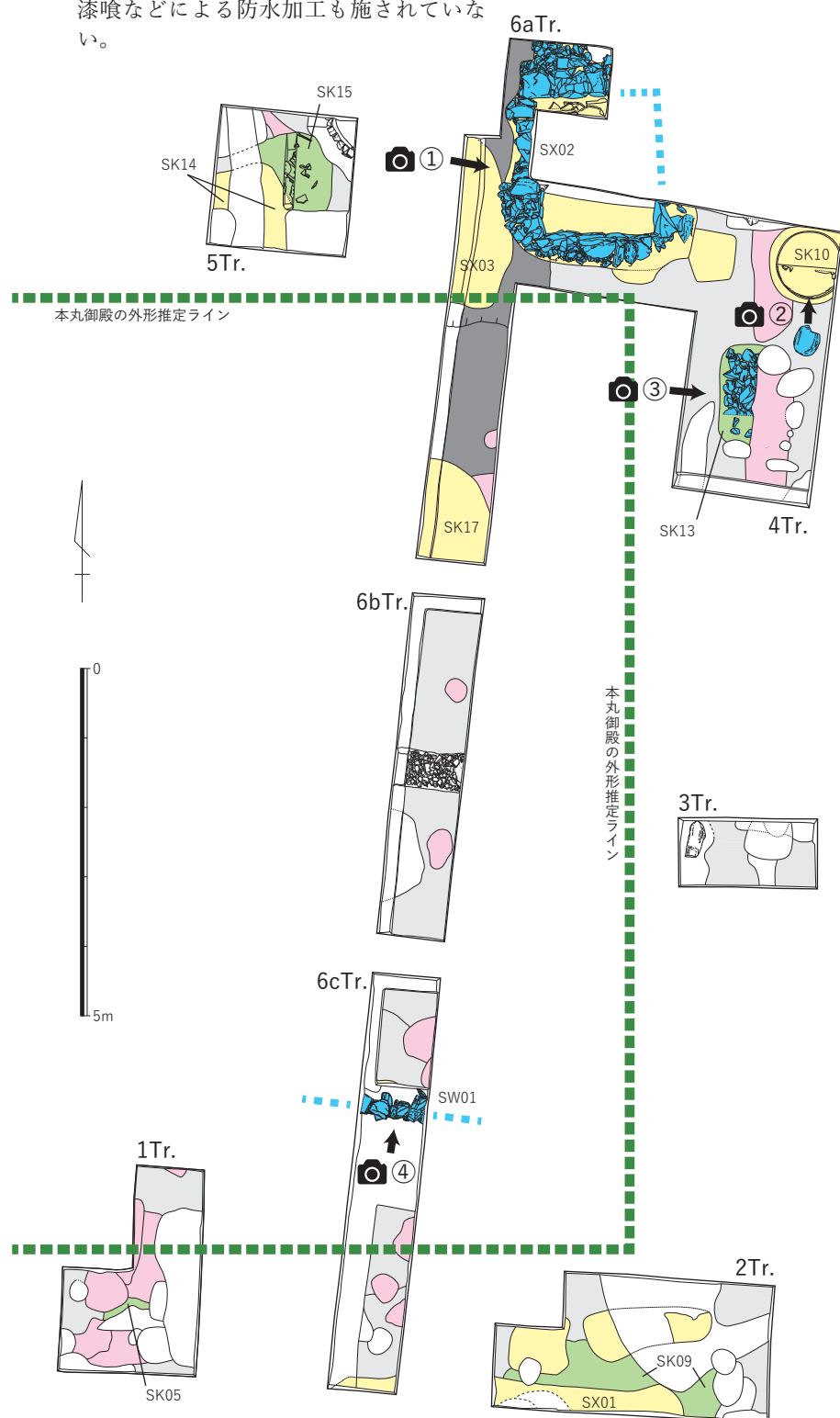
③本丸御殿の関連遺構か？ SK13(4Tr.)

1×1.5mの土坑内には人頭大の礫が入られ、上部は特徴的な灰色シルト(粘土)で埋められている。



④地蔵ヶ嶽城の石積み遺構 SW01(6cTr.)

現在の大洲城の石垣とは異なる石材で積まれている。高さは約50cmだが、本来はもう少し高かった可能性が考えられる。



凡例

- …本丸を造成した盛土
- …地山(自然の地盤)
- …本丸御殿?の遺構(江戸時代前期)
- …江戸時代～明治初期の遺構
- …時期不明の遺構(江戸時代?)
- …石(遺構に関するもの)
- …攪乱坑

図4 試掘トレンチ配置図と主な遺構の様子

③江戸時代～明治時代初期

本丸御殿が廃止された後、明治期までの間は絵図から見て建物等の無い広場だったことが想定されますが、調査の結果、江戸時代～明治時代初期頃の可能性がある遺構が数多く発見されました。これらは江戸期から明治時代初期頃における本丸の利用を考える上で貴重な成果と言えます。

SX02(4・6aTr)は石組みの穴蔵^{あなぐら}で、平面形は1.65×1.95mの長方形、高さは1.05mを測り、大洲城の石垣と同じ石材により3～4段で築かれています。内部で遺構の機能を示すような痕跡や遺物が発見されておらず、上屋^{うわや}の構造も不明であることから遺構の性格は不明ですが、地下倉庫的な施設ではないかと考えています。これほどの規模の施設がなぜ絵図に描かれていないのか、謎の多い遺構といえます。

SX01(2Tr)、SK14(5Tr)、SK17(6aTr)では多数の瓦等が発見されており、城内の建物等を破棄した際の廃棄土坑^{はいきどこう}と考えられます。

SK10(4Tr)は土師質の大甕^{はじ おおがめ}を埋めて設置した土坑で、甕の底に粘土の堆積が見られることから水溜め用の甕と考えられます。

○地蔵ヶ嶽城(大津城)略年表

元弘元(1331)年	宇都宮豊房により地蔵ヶ嶽城が築城？
天文9(1540)年	宇都宮豊綱・房綱と摂津親興・親宣との戦い。宇都宮側は地蔵ヶ嶽城まで後退。
弘治2(1556)年	宇都宮氏が西園寺領を侵犯。西園寺公高を討つが反撃に遭い、地蔵ヶ嶽城まで攻略される。
永禄10(1567)年	長宗我部氏の侵攻。地蔵ヶ嶽城(比志城)などが落ち、宇都宮氏は長宗我部氏に従属。 長宗我部氏は、地蔵ヶ嶽城の守りとして兵1,500騎を配置。
永禄11(1568)年	鳥坂合戦。河野氏・毛利氏を前に、一条氏・宇都宮氏が大敗。 毛利氏により地蔵ヶ嶽城・八幡城落城。宇都宮豊綱は、備後国三原へ配流。
天正元(1573)年	宇都宮豊綱、地蔵ヶ嶽城へ帰城。 宇都宮豊綱との姻戚関係にある大野直之と河野氏とが衝突。 河野氏が地蔵ヶ嶽城を攻略。
天正5(1577)年	長宗我部氏の侵攻。河野氏が地蔵ヶ嶽城から敗走。
天正7(1579)年	河野氏・毛利氏により、地蔵ヶ嶽城落城。大野直之、敗走。
天正8(1580)年	大野直之が先陣となり、地蔵ヶ嶽城の河野氏守備兵を追い払い、城主に就く。 河野氏と大野直之との間で和睦。
天正13(1585)年	豊臣秀吉の四国征伐。大津城は小早川隆景の統治となる。
天正14(1586)年	小早川隆景による伊予国内の城郭整理が行われ、大津城は存城となる(小早川秀包が在城)。
天正15(1587)年	戸田勝隆が大津城へ入城。
文禄4(1595)年	藤堂高虎が大津城へ入城。
慶長14(1609)年	脇坂安治が大津城へ入城。
元和3(1617)年	脇坂安元が転封。加藤貞泰が大津城へ入城。以後、加藤家が13代にわたり統治する。
元和6(1620)年	加藤貞泰、城内の長屋・塀破損の作事が認可される。
元和9(1623)年	加藤泰興が、2代藩主に就く。
万治元(1658)年	加藤泰興、石垣8ヶ所の再築を幕府に願い出て、認可される。 公式文書における「大洲」の初出。

※年表作成にあたり、『増補改訂 大洲市誌』(大洲市誌編纂会、1996)より引用した。

※大洲城の名称については、天正13年以降を「大津城」とし、それより前は別称の「地蔵ヶ嶽城」に統一した。